スピンアラウンド

筆者　林　和宇雨

岐阜羽島駅から新幹線に乗って、窓際に座り、富士山が見たいと思っていても、毎回なぜか直前で寝てしまい、いつの間にか小田原駅を過ぎていてがっかりする。

東京駅は、いつもの通り、新幹線の改札口で、女性駅員が「ここは、乗り換え口なので切符を持って行ってください」とマイクで話している。たくさんの改札口があり、新幹線の切符を取り忘れる人が相変わらず多いのだろう。新型コロナウイルス感染症が流行するずっと前からの光景だ。「切符を持って」とだけ言えば聞き取りやすいのにと、いつも、早苗は思っている。

埼玉県所沢市に住む弟から、母が救急車で運ばれたと連絡があったのは、火曜日の夜のことだった。母は、父が亡くなってから一人で暮らしている。今度こそ、もう会えなくなるのではないかと思い、仕事を休んで駆けつけたが、すでに自宅に戻ってきており、仕事復帰も考え始めているようだった。

「今回は、もう仕事をやめようかと思っている。スタッフに迷惑がかかるし、こんなおばあさんが働いていても足手まといだし」

早苗の母は、看護師として長年病院で働き、現在はデイサービスで、高齢者の食事介助やレクレーションを担当している。なんと８４歳。電動でもない自転車で２０分かけて通勤している。

「おかあちゃんも、だいぶしんどそうだけどな」

実家の隣に住む弟の真一が声をかけてきた。その表情を見ながら、真一の家に上がり込んだ。真一は、高校の国語教師であり、野球部顧問として指導もしている。高校時代は、野球部で甲子園を目指していたが、肩を壊し、地方大会に家族全員で応援に行ったが伝令だけの選手で終わっていた。だから、顧問と言っても、ハードな練習は避け、老人会や地元商店街との交流試合などを行い、地域に根ざした部活動を行っていた。卒業した生徒が、よく自宅に遊びに来ているのを目にした。

「お姉さん、新所沢パルコでバイトしてなかったですか？」

真一の妻裕子が、キッチンから出てきた。裕子は、特別支援学校の教員をしている。生徒のイラスト展が新所沢パルコで開催されており、母を連れて出かけようと誘ってきた。

母を伴っての久々のパルコは、やっぱりさっぱり変化してなかった。地下の駐車場は、前とおんなじように天井が低いし、特徴的な半円の入り口もそのままだった。ちっとも古ぼけてなんかいない。イラスト展の作品には、いろんな字体の『新所沢』を表現した作品や、象徴でもあるパルコ入口のイラストがあった。

『新所沢パルコ４０周年の想いを込めて・・・』ん、、？

「あれ、パルコもう４０周年まじで・・・」裕子が躊躇いがちに

「パルコなくなるけどお姉さん知らなかった？」

「とりあえずご飯たべよ」

母が、疲れた様子だったので食事をすることにした。

このとき早苗は何を食べたか全く思い出せないくらい、まさかの『さよならパルコ』だった。４０年前の学生時代の甘酸っぱい思い出が、喉にせりあがり、お酢や切符やホットミルクの混ざった匂いがこみあげてきて困った。そのほろ苦い記憶と匂いをどうにかゴックンと飲み込んだけど。

早苗は、大学２年生の時、新所沢駅改札口前のミルクスタンドでアルバイトをしていた。

父親が高校生のときにガンで亡くなり、母に負担をかけたくないため、バイトを２つ掛け持ちしていた。

「おはようございます。ミルクスタンドの鍵を取りにきました。」

早苗の一日が始まる。新所沢駅の駅員さんに声をかけ鍵を取りに行く。ミルクスタンドの出入り口の鍵は、駅事務所内に保管されており、中に入ると、駅員さんたち男性ばかりの制服の匂いが立ち込めていて、息を止めて鍵を取りに行っていた。。

ミルクスタンドの朝は早い。早朝から通勤のサラリーマン対象に、立ち飲みの牛乳やコーヒーやパンを販売していた。

「いつもの温度のホットミルクに半分の砂糖を入れて、蒸しすぎのべちゃべちゃした肉まんお願い」

常連のおじさんの独特な注文もある。狭い店内はいつも、ホットミルクと肉まん専用蒸し器のすえたなんともいえない匂いが漂っている。

今みたいに、マックやスタバなど、朝からやっているカフェがなかった時代ゆえの対面の販売で、1畳くらいの売り場で朝5時半から7時半までバイトして、それから大学の1限に間に合うようにシフトを組んでもらっていた。7時半から来るパートの道子さんは、とにかく顔が真っ白になるくらいファンデーションを塗っていて、目も本当の大きさがわからないくらいメイクばっちりで大きな声の人だ。

「早く大学行かないと遅刻するよ。こっちでバイト時間は書いといてあげるから早めに電車に乗りなさい」

道子さんは、中学生1人、小学生2人の男の子ばかり子供が3人いて、毎日が闘いらしい。毎回交代の時、手作りのパンやケーキを持ってきてくれて、朝ごはんの代わりになって助かった。

ミルクスタンドは、改札口の正面にあって、駅員さんが座って切符を切っていた。ミルクスタンドの早苗と駅員さんと向き合う形なので、駅員さん全員と顔見知りになった。

その中の大場さんは、道子さんによると就職して5年目。毎朝、大きな声で乗客に挨拶しているけど、ほとんどの乗客は無視。それでも一人一人に挨拶することをくじけずに毎朝続けている。おまけに、制帽が頭に対してやや小さいように思えてなんだかいつもおかしくて、大場さんが改札に座ると早苗はいつも以上に笑顔になってしまっていた。

道子さんから、ある日

「大場さんとご飯に行ってみたら」

と言われた。なんとなく断わりにくくて、近くの新所沢パルコに食事に行った。大学2年生の6月にオープンしたパルコでもバイトしていた早苗だが、パルコで食事をしたこ

とはなかった。バイト先に行くのも恥ずかしいので、別のレストランに行った。大場さんは、高校卒業後、西武鉄道に就職して、社員寮に住んでいるそうだ。大場さんは、なんか切符のにおいがした。手も少し黒く切符で汚れていた。今は駅員だけど、将来は運転手を目指しているそうだ。

「満員電車を一人で運転することが夢なんだ。埼玉県から東京に多くの人が働きに行って、夜にまた埼玉県に帰ってくる。みんなお疲れ様、お帰りなさい、ありがとうという気持ちになるんだ」

本気で話す大場さんのまっすぐさに少し引きながらも、なんとなく時々会って、あちこち遊びに行くようになった。

よく、西武球場にライオンズの応援に行った。西武鉄道勤務だったからチケットの入手が容易だったかも。球場に屋根がなくて、夏はメチャクチャ暑くて、秋口は、からっ風が吹いて寒かった。ライオンズの選手とも、練習中に気軽に話せたし、西武線所沢駅前プロペ通りに時々選手が歩いていたこともあった。西武池袋線小手指駅前のマンションに選手が住んでいるという情報があって、選手に会いたくて小手指駅で、二人で待ち合わせをしてから西武球場に行ったこともあった。球場の芝生で昼寝したり、お弁当食べたり、のんびりした球場だった。なにより、芝生の青い匂いが心地よかった。

早苗の掛け持ちバイトのもうひとつは、パルコの中にあるレストラン街の回転寿司で、青い縦縞の山本寛斎デザインのユニホームが売りだった。

「早苗ちゃん、今日は、マグロがおいしいからお客に勧めてね」

回転寿司では、田中店長と正社員の美和さんがいた。店長は、いつも新鮮なネタを教えてくれる。美和さんは、主にレジ担当で年下の男性と同居していた。早苗や他のバイトたちは、レジには触らせてもらえず、もっぱらお客が食べた皿数を数えたり、机を拭いたりのシンプルな仕事内容であった。とにかく、元気よく大きな声で接客していればよかった。閉店時間になっても寿司が残っていたら、夕飯代わりにと店長がこっそり持ち帰らせてくれたこともあった。

回転寿司のお皿は、１００円から３００円まであって、湯飲みと、重ねたお皿を並べて、湯飲みと同じ高さになったら、７皿食べたことになるからお皿の枚数が数えやすかった。パルコは、新所沢駅のそばにあるから、夕方になると東京から帰ってきたサラリーマンが多く立ち寄り、回転寿司もにぎやかだった。

「早苗さん 忘年会やるから幹事お願いね」

美和さんに言われて、所沢プロペ通りのレストランを選んで忘年会をやった。店長は東京に住んでいたから、閉店してから忘年会をやっていると終電に間に合いそうになく、美和さんが宿泊先を手配した。

「美和さんに予約してもらったホテルは、まさかのラブホテルだった。ありえないだろ。

入りにくかった。所沢にはホテルがないのか」

忘年会の参加費をもらいに行った時、店長がそう言って本気で怒っていた。お店では、笑えないから、バイト仲間みんなで帰りの駐車場で思い切り笑った。低い天井の駐車場にみんなの笑い声が反響していた。

毎週木曜日は、６８０円で寿司食べ放題デーだった。早苗は、絶対店に儲けはないと思っていたが店長には言えず、長蛇の列となり待ち時間が多く、お客に頭を下げ続ける木曜日が毎週あった。

５人家族のお客もいて、皿を片付けるだけでもひと苦労した。店内には、寿司飯の匂いが充満していた。たくさんのシャリが炊かれ、ムラサキやガリの匂いと合わさって、木曜日は、回転寿司の匂いが、山本寛斎デザインのユニホームにしみ込んだ。バイト仲間とは、魔の木曜日と呼んでいて、その日のシフトに入るのをみんな嫌がった。

「全然、お寿司が流れてこない」

苦情も多かった。食べ放題の日だけ、必ず来る家族がいて、いつも文句ばかりで、気が滅入る木曜日だった。金曜日の朝、ミルクスタンドに立つ疲れ果てた早苗を見ていた

大場さんは、放っておけなかったのか、毎週木曜日夜に駐車場で待っていてくれるようになっていた。

店長は、お客にそしてスタッフにも謝るばかりで、厨房も疲弊していたし、やはり儲けがなかったのかいつしか食べ放題はなくなっていた。

美和さんはいつも

「お金をためて貴一と結婚する」

と言っていた。貴一さんがどんな人か知らないけど、35歳の美和さんと貴一さんがどんな生活を送っているのか想像できなかった。

バイト帰りに自転車置き場の駐車場で、仕事帰りの美和さんを貴一さんが迎えにきていたのを見かけた。

「おせえんだよ」

「ごめん」

回転寿司は夜10時までだから、そこから片付けしていると10時半になってしまう。

「これから晩飯どうするんだよ」

「朝カレー作って冷蔵庫にいれてある」

なんか見たくなかった光景を後に、自転車を思い切り漕いで帰った。

大場さんとは、夏が過ぎる頃には少しずつ遠出するようになった。ディズニーランドに行ってミッキーの腕時計を買ってもらった。ミッキーの手が時計の針になっていて愛愛しかった。ディズニーランドの帰り、京葉線の電車の中で

「早苗ちゃんと呼んでもいい？」

と聞かれた。それまでずっと名字の酒井さんと呼ばれていた。初めて食事に行ってから数か月が経っていた。乗り換えて、西武新宿線の車内で、初めて手をつないだら、たぶん改札鋏でできたであろうタコに触れた。見かけによらず、ごっつい手だった。鎌倉にも行って、江ノ電に乗って、あちこちのお寺に行った。やっぱり大場さんは電車が好きで、だから自動車は持っていなかった。

「おふくろが一人で秩父に住んでいて、一人っ子で・・・」
お母さんのことを話す時の大場さんが、好きだった。お母さんは、秩父の農協に勤務していて、女手ひとつで大場さんを育てたらしい。お父さんのことは聞けなかった。

携帯電話もない時代だから、大場さんとの連絡はいつもミルクスタンドのバイトの時で、大場さんが改札に座った際、向かい合って目を合わせたり、大学に行く時、改札を通るから、そのときメモを渡したりした。駅長さんに見つかるとややこしいから、ちょっとしたスリル満点の交際でもあった。大場さんの寮の電話番号も知らなかったけど必要なかった。

毎週木曜日、パルコのバイトが終わったら、勤務がないときは、駐車場で大場さんが待っていてくれた。天井が低い駐車場で、大場さん一人を待たすのが申し訳なくて、大場さんが待っている木曜日は、食べ放題で忙しかったけど、素早く店内を掃除して、山本寛斎デザインのユニホームを全速力で脱ぎ、駐車場に向かった。

「夜の帰り道が心配だから」
自転車を二人乗りして、自宅近くまで大場さんが送ってくれて、そこから大場さんが歩いて寮まで帰宅していた。だんだん、なかなか離れつらくなって、自宅とパルコを何回か二人乗り自転車で往復したこともあった。

「お酢の匂いがする」
大場さんは、いつも私の髪の匂いを嗅いで、そう言っていた。

パルコがオープンして初めてのお正月が来た。年末年始は、時給が高くなると店長から聞いたから、毎日回転寿司に行った。大学も、しばらく冬休みだからミルクスタンドも休んで、大場さんと会うこともなかった。そして、だけど、それっきりなぜか大場さんは、お正月が明けても、パルコの駐車場にも新所沢駅にもいなくなっていた。ミルクスタンドにバイト復帰しても知らない若い男性が改札口に座っていた。

思い返すと、大場さんは早苗より３つ年上だったし、社会人５年目で、早苗との結婚も考えていたらしく、所沢航空記念公園で散歩していた時「一度、秩父の母親に会ってほしい。」

と言われたが、早苗は、心理学部で臨床心理士になりたくで勉強していたし、結婚となると将来が見えなくなって、心が重くなり、曖昧に答えて、それ以来その話はなくなっていた。

決して、大場さんとの将来を考えていなかったわけではなかった。ただ、まだ大学２年生だし、大場さんのことは、好きだけどお母さんに会うのは、気後れしたし、あんまり考えたくなかった。学生と社会人との微妙なスタンスの違いがあったかもしれない。

それにしても、きちんとお別れもしないままの状態はしんどかった。やけくそで、年末年始で稼いだ回転寿司のバイト料で１０万円もするバーバリーのコートをパルコで買った。それでも、埋めきれない気持ちが残った。バーバリーのコートからは、分厚い新品の生地の匂いがして、好きになれずずっと着ていない。

パルコの駐車場は、相変わらず天井が低い。今日も貴一さんが、美和さんを迎えに来ていた。

「外は寒いからマフラー持ってきた」

貴一さんが、美和さんにマフラーを巻いてあげていた。二人を見て泣けてきた。本当に大事なものを失ったことに気がついた。

大学４年生になり、卒業式に出席するため、西武新宿線に乗って大学に向かった。袴が着たくて、友人の住んでいる柴又まで行って、一緒にそこで袴を着付けしてもらって、卒業式に出席予定だった

「おはようございます。次は、西武新宿駅終点です。皆さん今日も一日元気で頑張って下さい」

車内アナウンスは、聞き慣れたまさかの大場さんの声だった。卒業式はどうでもよくなり、車掌室がある電車の後ろの車両に移りたかった。けれども、満員電車で大勢の人の波に飲まれ、電車のドア付近にいた早苗は、西武新宿駅改札口までその流れに逆らえ

ず、改札を出てしまっていた。ただただ、そのままぼんやりしていて、卒業式には遅刻した。

「車掌になっていたんだ」

春になって、回転寿司の店長も転勤し、美和さんも貴一さんとの結婚が決まり退職していた。早苗も就職とともに、パルコへは立ち寄ることがなくなっていた。大学卒業後、東京の病院で臨床心理士として働き始めた早苗は、白衣を着て、患者さんの心理検査や相談を受け持ち、大場さんの声を時々聞きながら、西武池袋線に乗って通勤していた。大場さんの声を聞くのは、毎朝のこともあったり、数か月後、病院の飲み会の深夜の帰りに突然聞こえたり、しかし早苗が、車両の後ろに行って大場さんを確かめることは、決してなかった。

西武池袋駅近くのカフェで、一人ぼんやり仕事帰りにコーヒーを飲むことがお定まりとなっていた。コーヒーの香りを嗅ぐと心が休まる。病院の面倒な出来事を家に持ち帰りたくなくて、よく帰りの電車に乗る前に立ち寄った。大場さんの声が今日も帰りに聞けるかなと、いつも思いながら、コーヒーを飲んでいた。

同じ病院に勤務しているケースワーカーの静雄も来ていて、時々席を移動して一緒に話すようになっていった。マンデリンコーヒーを好む静雄は、岐阜県出身の長男でいずれ実家に帰ると言っていた。大場さんのことを忘れていたわけではなく、しかし一緒にマンデリンコーヒーを飲んでいるうちに、実直な静雄から漂う優しい香気に惹かれていった。

「岐阜の実家の両親に会いに来てほしい」

「まだ仕事を続けたいので・・」

「仕事は見つけてきた」

静雄に言われ、早苗は自分のことをここまで必要としてくれ、大事にしてくれる人を今度こそ大切にしたいという思いから、新幹線に乗って岐阜羽島駅に初めて降り立ち、

やがて、岐阜県以外の人は知らないであろう、日本最大級の貯水量を誇る徳山ダムがある岐阜県揖斐川町に嫁ぐこととなった。

「働く場所は探してきた」

静雄が、どうやって就職先を探してきたのかわからなかったが、その気持ちが心嬉しくて、早苗は、また病院に勤務し臨床心理士として働いた。

静雄の妹芙美は、岐阜県内の短大に事務で勤務しており、

「山本寛斎が来た」と話していた。寛斎は小学校から高校まで岐阜で過ごしていたから、岐阜県の短大で定期的に特別講義を行っていた。

「とっても、かっこよかった」と芙美がいき込み話していた。

「大学時代、バイト先の回転寿司で寛斎がデザインしたユニホーム着てたよ」

「さすが都会の人は違う」

芙美は、いつもこんな感じで早苗を都会人扱いする。芙美は、地元の高校を出て地元の短大卒業後、幼馴染と結婚している。早苗から見れば、親のそばに住んでいるし、地元にはむちゃくちゃ詳しいし、うらやましいと思う。ただ田舎特有の閉そく感や岐阜弁の『やらしい』が象徴するように、なにかと、少しでも目立つことをするとやっかみが入る風土であることは、早苗も心に感じ取っていた。

岐阜県に来てからも、結婚しても子供ができても時々大場さんを思い出していた。なんで急にいなくなった。どうしてきちんと話すことなく、いなくなったんだろう。早苗は、埼玉県の実家に帰るたび、西武線に乗車する都度思い返していた。いつか会って理由を聞きたいと思っていた。

まさかの新型コロナウイルス感染症蔓延で、実家への帰省もままならなくなった。実家が、埼玉県がずいぶん遠くなった。

収束という単語を耳にするようになった早苗は、数年ぶりに映画館で「アナログ」を見た。素性も連絡先も知らないまま、毎週木曜日に喫茶店で待ち合わせするという、時

代に逆らったアナログな関係の男女二人が主人公。メールも携帯番号も知らないまま木曜日が待ち遠しく、愛しい人への気持ちが大きくなってプロポーズを決意するも、突然彼女が現れなくなってしまう。

「お互いに会いたいという気持ちがあれば絶対に会えますよ」

という約束にも関わらず、月日がたち、彼女がなぜ木曜日に喫茶店に行くことができなくなったかの理由が判明して、、という内容だった。そんなに男性が、いつまでも、いなくなった女性を想い続けられるものなのか。早苗には、どうしても、このストーリーを飲み込むことができなかった。とにかく、二宮が泣いてばかりの映画だった。

母親の見舞いから戻った早苗は、日常に戻った。

「あなたが来てくれて元気が出た。仕事をやめようかと思ったけど、一度退職するつもりで、デイサービスに行ってみたら、スタッフも利用者さんも待っていたと言ってくれたし、もう少し頑張ってみる」

母から元気な電話があった。早苗が子供のころから、じっとできない性格で朝早くから、うるさいくらい掃除機をかけ、どんなに仕事が忙しくても夕飯を作ってくれ、早苗がパルコでの回転寿司のバイトで帰りが11時近くなっても待っていてくれた。もう少しの間、いやずっと元気でいてくれたらと早苗は思う。

感染症の影響らしく、地域にあった商店の廃業が目に付いた。岐阜県でただひとつのデパート高島屋も営業終了するらしい。

子供たちが通学に利用した駅の乗降客も観光客も減少し、駅前の旅行代理店も撤退した。そこで、思い切って、早苗は、その場所を借りて駅前が元気になるようにとパンやコーヒーを販売し、観光客用に電動レンタサイクルの貸し出しを始めた。臨床心理士の仕事をセーブし、店番は、地域のみなさんと交代でやってみた。

「岐阜のマチュピチュに行きたいんですが、どうやっていけばいいんですか？電動レンタサイクルを借りたいので」

電動自転車で行ける天空の茶畑が、ネットでバズっており、遠くは北海道からもカップルが来たし、最近は、海外からの観光客もなぜか来るようになった。山の上にある茶畑が、ペルーのマチュピチュに景観が似ていて、その景色が人気になっているそうだ。

店番の人手不足もあり、仕事のない日は早苗が店番に立つ日が多くなっていた。

木曜日の朝、駅前のお店にいき、パトランプをつけ、カーテンを力いっぱい開けた。岐阜県では、このパトランプ回転灯が店の営業開店中の合図であり、必需品なのでスタッフが持ち込んでくれていた。

早苗は、深呼吸して冬の風を吸い込んだ。終着駅でもある駅から乗客が降りてくる

「今日も新しい誰かに会えますように」

いつもそう思いながら、店番をしている。

「天空の茶畑に行きたいので 電動自転車を貸してください。」。

リュックを背負った男性の声に早苗は振り返った。どこかで聞いた声。。

「どちらからおいでですか」

「埼玉県です」

「私も埼玉県出身です。遠くからありがとうございます。」懐かしい匂いがした。かすかな切符の匂い・・・。「電動レンタサイクルの利用申し込み書に名前をお願いします。」

申込書に書かれた大場敏郎の名前にその刹那から目が離せなくなった。

「えっ わたし」と言いかけた途端

「早苗ちゃん？」

車内アナウンスと同じ落ち着いた声が、耳に飛び込んで来た

「うん パルコ閉店するんだって」

そんなことを言いたいわけではなかった。

「ぜひ天空の茶畑を案内させてください。コーヒーのおいしいカフェも行ってみませんか？」

喫茶店珈琲家まめに２台の電動サイクルを停め、店内に入る。
「今日も木曜日ですね」
「食べ放題の日だね」
「パルコなくなるね」
茶畑のある山が見える窓側に座った。
「まぶしいから下げようか」
ロールカーテンに手をかけていたマスターに、小さく首を振り目で断った。
山と山との間に見える景色こそ、今から二人、電動自転車で登っていく場所があり、そこだけが白く光を放っていた。
「母が、コロナに感染して去年亡くなったんだ。以前から、いつか全国の鉄道に乗ってみたいと思っていたから、観光をかねて、より多くの路線に乗ることを目指してるんだ。乗りつぶすのがメインの乗り鉄っていうやつ知ってる？路線ごとにアナウンスの内容や話し方も違うし、おもしろいよ。それに、もしかしたら、万が一 いつか早苗ちゃんが駅前にいるかと思って全国の駅を回っていたよ。
あの時の冬の話だけど、車掌試験受けたこと言ってなかったよね。受かる自信なかったから、話さなかったけど合格したら話そうと思っていて、、。
車掌試験に受かって１月に転勤が決まって、伝えようと思ったけど、１２月末に早苗ちゃんミルクスタンドにいなくて」
「冬休みだったから、大学休みだからずっとパルコでバイトしていたんだよ。１月の３週目からはミルクスタンドにいたよ。でも、新所沢駅にも、木曜日にも、駐車場にもいなかったし大場さん」
「１月になったら、ミルクスタンドかパルコに行けばいいと思っていたんだけど、お正月過ぎに秩父の母親が脳梗塞で倒れて、すぐそのまま転勤だったから」
「ずっと、ミルクスタンドにもパルコにもいたよ。わたし」
「母親が後遺症で右半身まひになり、失語症で言葉も話せなくなって、早苗ちゃんには、どうしても言い出せなかった。心理学を勉強して、社会人になる早苗ちゃんと僕とではどうしても価値観、人生観が違うような気がして、、。踏み切れなかった。人生の色

がなんとなく違う気がして会いにいくことができなかった。時々、パルコの駐車場まで行ったけど、やっぱり、帰ってきてしまった。僕の人生を早苗ちゃんに背負わせることができなかった。早苗ちゃんは、僕の中でいつも笑っていてそこが好きだったから、、。ミルクスタンドでも、いつも元気にどんなお客さんにでも丁寧に笑顔で接していたのをいつも見ていた。だから、道子さんに早苗ちゃんを誘ってもらうように勇気を出して頼んだんだ 本気だったし、ずっと、いつも早苗ちゃんの笑顔を大切にしたかったんだよ。早苗ちゃんのことが愛おしすぎたんだよ。きっとたぶん」

早苗は、下を向いてから顔を上げてはっきり、そして泣きそうな笑顔で言った

「お互い会いたい気持ちがあればいつか会えるんですね。」

大場さんは、車掌の後、西武鉄道の運転手となり、今は、運転手を育てる仕事をしているらしい。合間を見て乗り鉄として、全国の鉄道を回っているという。お母さんの介護をしながら、勤務を続けて、秩父の同窓会で再会した、お母さんのこともよく知っていた地元の同級生と２８歳で結婚して、子供は 2人。すでに孫もいて毎週土曜日は子守で忙しいと言った笑顔が ４０ 年前と全然変わってない。

「パルコが４０周年ということは、私たちも４０年前に付き合っていたことになるなんて」二人で顔を見合わせて笑った。

天空の茶畑に向かって自転車を漕いでいく。茶畑にはハート型の窓があるカフェがある。

大場さんは、それを見てなんて言うかな。一緒に写真撮ってみたいな。自転車が坂道に差しかかった。大場さんの自転車は少し遅れがちだ。

大場さんが自転車のペダルを漕ぐたび、車輪がまわる。前に進んでる。新しい出会いや別れや再会があって、回転寿司のレーンみたいに また同じ場所に戻ってくる。新所沢駅前のミルクスタンドでバイトしていて、大場さんと知り合って、今度は、また駅前のお店で大場さんと巡り合った。

きっとこれからも新しい出会いと別れが続く。

♪胸を張って歩けよ 前を見て歩けよ
希望の光なんてなくったって いいんじゃないか♪
チャットモンチーの曲が急に頭に流れてきた。

思い通りにならない毎日でも、生きにくい毎日でも、新しい朝が来て、新しい匂いや新しい出会いがきっとある。

さよなら 思い通りにならない昨日さよなら
新所沢パルコ
さよなら 切符の匂い